

平成 18 年度～令和 3 年度における大多喜城分館の 入館者数解析 —本館との比較

奥田昌明

千葉県立中央博物館

〒 260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

E-mail: m.okd10@pref.chiba.lg.jp

(2022 年 9 月 30 日投稿；2023 年 11 月 29 日改訂；11 月 29 日受理)

要旨 千葉県立中央博物館の大多喜城分館は、平成 18 年 4 月に県立総南博物館から改組したが、施設改修等の事情から、令和 3 年 12 月より休館している。この大多喜城分館における平成 18 年度からの入館者傾向を解析した。令和元年度以降では日ごとの電子データを用いたが、電子データのない期間では博物館年報に記載された各月ごとの人数を再入力することで、精度はやや劣るが入館者数の年齢構成や季節ごとの推移を復元する手法を考案した。その結果、大多喜城分館の入館者数は中央博物館の本館と同程度か、年度によっては本館より多い傾向が示された。また、大多喜城分館の利用者は 65 歳以上の高齢者が多く、それが平日における大多喜城分館の非常に高い入館者数を支えている事実も読み取れた。

キーワード： 大多喜城分館，入館者数，日ごとデータ，年報，中央博物館本館，総南博物館

大多喜城分館は、県指定史跡である上総大多喜城本丸跡に昭和 50 年 9 月、鉄筋コンクリートで建てられた天守閣を有する県立総南博物館としてオープンした。昭和 57 年 6 月に入館者数 100 万人、昭和 63 年 11 月に入館者数 200 万人を達成するなどした後（千葉県立総南博物館，1996a），平成 18 年に千葉県立中央博物館の大多喜城分館と改組した。戦国末期に本多忠勝が入城した等の史実にちなみ、江戸時代の甲冑を始めとする武具のほか、城下町の模型や刀剣類、古文書、商屋の調度品などを常設展示していた。なお大多喜城分館の企画展示としては、毎年夏に収蔵資料展が、秋に企画展が実施されてきた（図 1）。ただ、築 40 年を迎えた 3 層 4 階の鉄筋コンクリート造りの天守閣に対する耐震強度等への対応が早急に求められたこと、さらに「県立博物館の今後の在り方」検討の中で地元の大多喜町への移譲方針が決定されたことから、施設改修のため令和 3 年 12 月 27 日より天守閣づくりの建物は休館となり、再開館時期は本稿執筆時点（令和 5 年 9 月）で未定である。

筆者は平成 22 年度から 27 年度にかけて中央博物館本館の教育普及課に在籍し、とくに平成 26 年度からの 2 年間は本館の入館者統計を担当した経験から、入館者数解析の作業を行ってきた（奥田，2018；2019）。この過程で本館の入館者傾向は概ね理解したつもりであるが、「それでは他館はどうなのか」という疑問は常に抱いてきた。

そこで本稿では、中央博物館の分館にあたる大多喜

城分館の入館者数解析をおこない、本館データと比較した。入館者統計のフルデータにあたる日ごとの電子データとしては、入手可能な令和元年度以降のデータを使用した。さらに令和 2 年 3 月からはコロナ禍により本館と大多喜城分館は臨時休館したため、日単位の情報がそろった開館状態の電子データといえるのは令和元（平成 31）年 4 月から翌年 2 月までの 11 ヶ月分となる。なお、日ごとの電子データのない平成 30 年度以前については、年報記載の月ごとデータを代用する形で補った。

本稿中で用いた図は、主にエクセルのグラフ機能で描画し、必要に応じてイラストレータを用いて清書した。なお、本稿における大多喜城分館の入館者グラフは、別



図 1. 大多喜城分館の展示チラシ。(左)平成 22 年度収蔵資料展『合戦と武器・武具』。(右)平成 28 年度企画展『甦った受難の刀剣—千葉県の赤羽刀—』。

表1. 大多喜城分館で平成18年度以降に実施された企画展示の一覧。 ※はコロナ禍の影響を受けた展示。

年度	カテゴリ	タイトル	(人)		(日)	
			入場者数	1日平均	会期	会期
H18	なし	大多喜藩弓術—森家資料—	13,733	275	4/1~5/28	50
H18	収蔵資料展	大多喜城の歴史	15,384	188	7/21~10/22	82
H18	企画展	本田忠朝の時代—関ヶ原から大坂の陣—	10,796	270	10/26~12/10	40
H18	収蔵資料展	当世具足の世界	16,697	188	12/14~3/31	89
H19	収蔵資料展	鉄砲	16,154	184	7/20~10/28	88
H19	企画展	武の鉄—鉄に秘められた武の遺伝子—	9,760	305	11/1~12/9	32
H20	収蔵資料展	刀剣	18,341	208	7/17~10/26	88
H20	企画展	武の美	10,868	320	10/30~12/7	34
H21	収蔵資料展	刀—拵(こしらえ)と刀装具—	21,004	269	10/29~1/31	78
H21	企画展	日本メキシコ交流の歴史—ロドリゴ漂着から400年—	11,027	324	9/17~10/25	34
H22	収蔵資料展	合戦と武器・武具	19,609	236	7/23~10/24	83
H22	企画展	武と華やぎの装い	11,729	345	10/28~12/5	34
H23	写真展	大多喜城と花の写真展	7,599	400	4/26~5/15	19
H23	収蔵資料展	武家の身代	22,432	255	7/14~10/23	88
H23	企画展	中房総の古社寺	13,820	419	10/28~12/4	33
H24	写真展	大多喜城の四季	8,704	458	4/23~5/13	19
H24	収蔵資料展	絵図と絵画	21,106	240	7/12~10/21	88
H24	企画展	上総の仏教美術—夷隅・長生—	14,260	366	10/26~12/9	39
H24	特別公開	重要文化財 大薙刀	3,333	278	2/4~2/17	12
H25	収蔵資料展	大多喜藩の弓術	23,608	268	7/11~10/20	88
H25	企画展	上総の仏教美術II—長生・山武—	14,068	361	10/25~12/8	39
H25	特別公開	久能山東照宮「家康公の時計」	7,046	294	9/3~9/29	24
H26	収蔵資料展	武具	27,917	317	7/10~10/19	88
H26	企画展	大河内松平家と大多喜	18,003	462	10/24~12/7	39
H27	収蔵資料展	武家の意匠	29,848	339	7/9~10/18	88
H27	企画展	甲冑とその時代	16,415	421	10/23~12/6	39
H28	収蔵資料展	大多喜城の歴史と絵図	26,879	328	7/14~10/16	82
H28	企画展	甦った受難の刀剣—千葉県赤羽刀—	16,834	383	10/21~12/11	44
H29	収蔵資料展	新収蔵資料展	年報から欠落	—	7/13~10/15	82
H29	企画展	なつかしの街並み—明治大正昭和の大多喜—	11,831	303	10/20~12/3	39
H30	収蔵資料展	職の世界	17,726	466	8/4~10/21	38
H30	企画展	房総ゆかりの甲冑	11,578	297	10/26~12/9	39
R1	収蔵資料展	大多喜城の刀剣	15,915	183	7/11~10/20	87
R1	企画展	鉄砲のあゆみ—火縄銃から回転式拳銃まで—	7,006	180	10/25~12/8	39
R1	特別公開	玉前神社・一宮町の宝物—一宮藩と加納家	8,450	180	12/12~2/9	47
R2	収蔵資料展	※ 大多喜城の弓	19,957	224	7/9~10/18	89
R2	企画展	※ 福を呼ぶ小袖と房総の万祝	12,118	311	10/23~12/6	39
R2	特別公開	※ 重要文化財 大薙刀	3,392	154	12/10~1/8	22
R3	収蔵資料展	※ 古文書にみる近世の大多喜	16,222	182	7/8~10/17	89
R3	企画展	※ 兜とカブト	10,944	281	10/22~12/4	39
R3	特別公開	※ 赤羽刀	3,185	199	12/9~12/26	16

に中央博物館の本館（千葉市中央区）の入館者データを同じ形式でグラフ化し、比較する形で取りまとめた。入館者データは単館でみるより複数の館で比較したほうが、各館の特徴を把握しやすい。本稿は大多喜城分館の入館者傾向を把握すると同時に、本館の入館者データと比較しながら気づいたことを記述する。

1. 大多喜城分館の企画展示の入場者傾向

平成18年4月の改組以来、大多喜城分館で開催された企画展示について、総入場者数および会期日数などを表1にまとめた。なお、ここで「入場者数」とは企画展示会場を含む博物館の有料スペースに入った人数を指し、他に講堂等の無料スペースを持つ本館においては、講堂等も含んだ博物館全体へ入った人数である「入館者数」とは区別される。また、各企画展示の入場者数の日平均を図2a, b, cに示した（参考として同形式の本館

データを比較用に掲載）。異なる季節間で企画展示の集客力を比較するには土日祝平均（奥田，2019）が有効とされるが、今回は日ごとデータが限られており、土日祝平均の計算が困難なので、平日と土日祝を区別しない「日平均」で比較した。

さて、本館で開かれる企画展示（とくに夏の展示）と比べたとき、大多喜城分館で開催される企画展示は、展示ごとの入場者数のばらつきがさほど大きくない（図2a, b）。これは、本館が自然誌系全般から歴史民俗まで多岐にわたる総合博物館であるのに対し、大多喜城分館は歴史民俗の単館であることと合致する。また、本館は職員数が多いため展示担当者が毎回変わるのに対し、大多喜城分館では比較的少人数で展示制作を回すため、入館者数も安定してくるものと思われる。

一方、大多喜城分館では夏開催の収蔵資料展（図中白棒、図2b）よりも秋開催の企画展（図中黒棒、図2a）のほうが、入場者が多い。一般に、展示の規模は企画展

大多喜城分館の入館者数解析

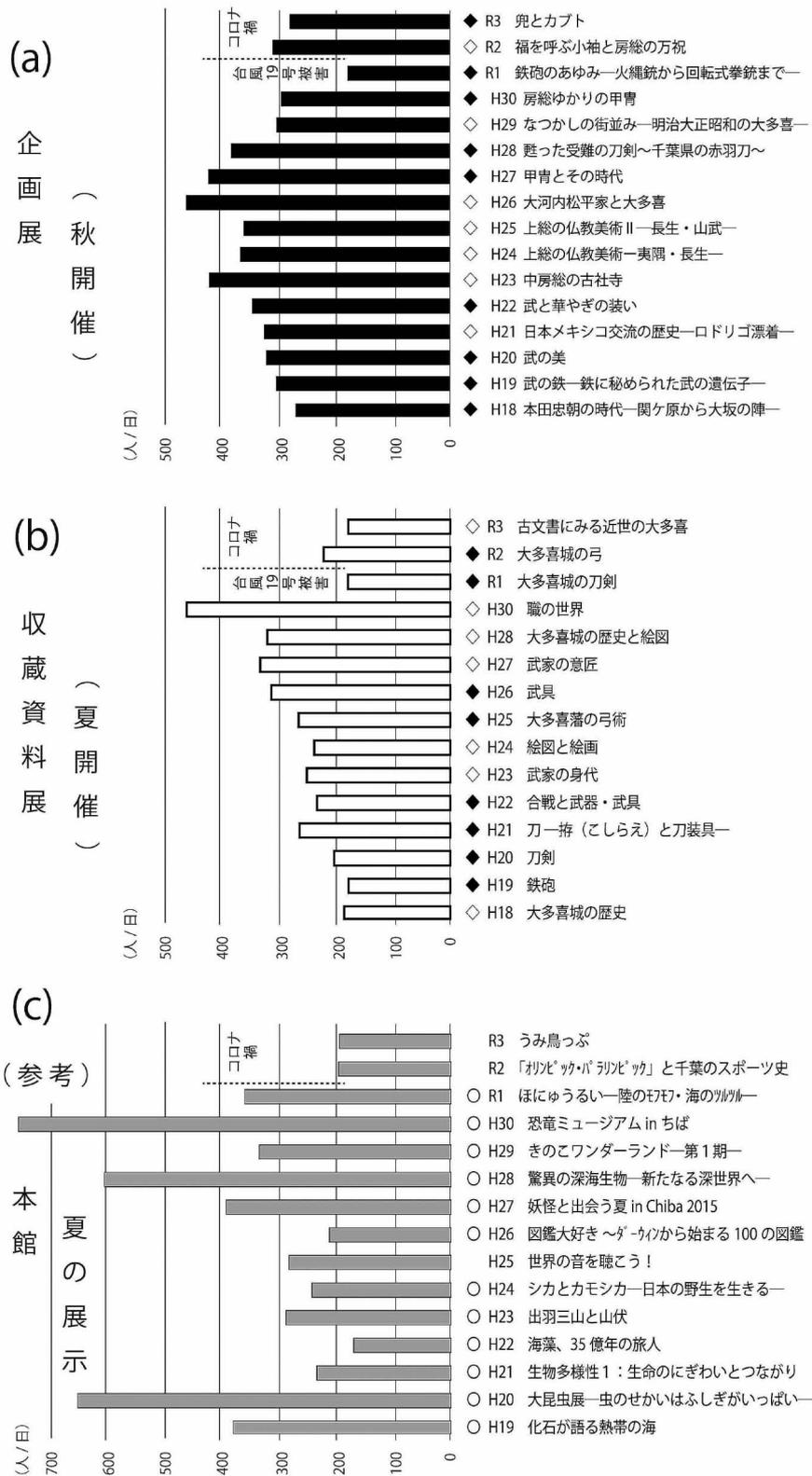


図2. 大多喜城分館で平成18年度以降に実施された、企画展示の入場者数の日平均。(a)主に秋開催の企画展。(b)主に夏開催の収蔵資料展。◆: 武具の展示, ◇: 武具以外の展示。(c) 同時期に本館で開かれた夏季展示の入場者数の日平均(奥田, 2021)。○: 企画展または特別展。印がないものは季節展または連携展など。

のほうが収蔵資料展より大きい上、夏休みという大きな学休がある夏季においては、本館では夏季展示は秋季と比べて2~4倍もの入場者数があることが多い(奥田, 2019; 2021)。対して、大多喜城分館では観光客の多い

紅葉の季節に合わせて秋に企画展が開催されている。

さて、大多喜城分館の企画展示においては、テーマと入場者数の間に大きなばらつきがみられない。おもに歴史系分野を取り扱う大多喜城分館の企画展示であって

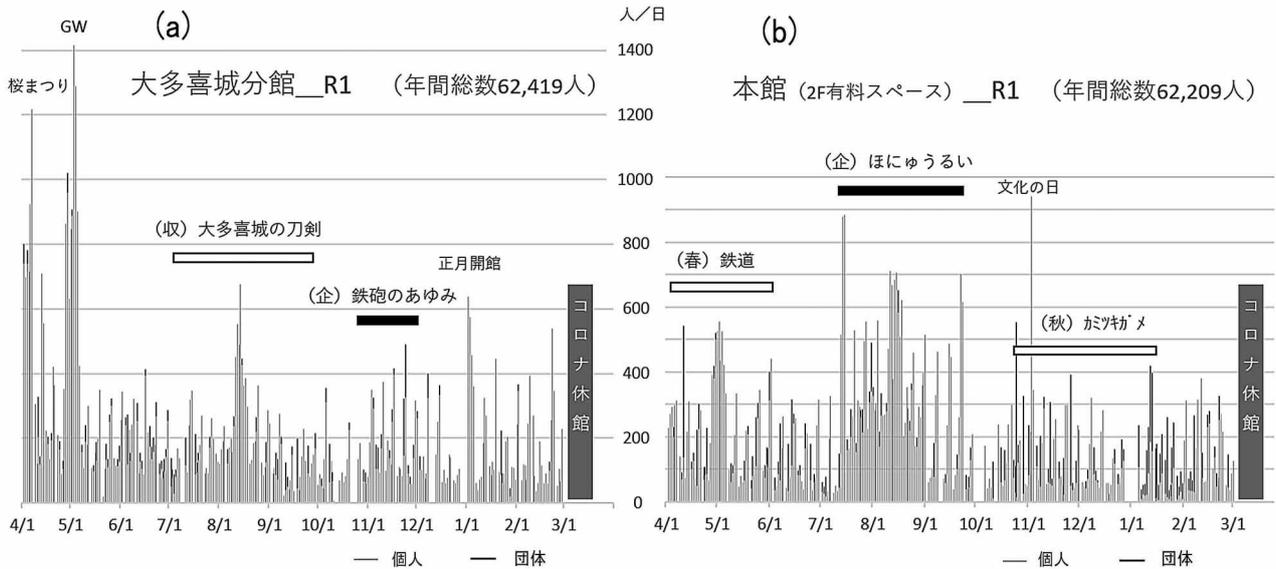


図3. 令和元年度における大多喜城分館および本館(2F 有料スペース)の入館者数の電子データ(日ごとデータ)。(企)企画展,(収)収蔵資料展,(春)春の展示,(秋)秋の展示。

も、大きく見れば「武具の展示」と「武具以外の展示」の2グループに分けられるが(前者を◆、後者を◇で表示; 図2a, b), 本館においては、平成27年度の冬に刀剣類の展示(刀匠 松田次泰の世界)が開催されたとき、冬季にしては入場者数が非常に多かったことから、昨今の刀剣アニメ等のブームも考慮したとき、武具の展示は一般来館者にとって人気なのだろうと考察された(奥田, 2018)。同じ論理を適用するなら、大多喜城分館では「武具の展示」のほうが入場者数が多いと予想される。

ところが今回の分析をおこなってみると、大多喜城分館においては武具の展示と武具以外の展示において、入場者数に明瞭な差はみられなかった。例えば図2において、企画展と収蔵資料展でそれぞれ日平均の最高値(400人/日以上)を示すのは、『H26 大河内松平家と大多喜』および『H30 職の世界』であり、どちらも武具以外の展示である。武具の展示では、企画展において『H27 甲冑とその時代』および『H28 甦った受難の刀剣～千葉県赤羽刀』が3位から4位に現れるが、武具の展示の入場者数がとりわけ多いという傾向はみられない。なお、図2で入場者数が最も少なかったのは、企画展では『R1 鉄砲のあゆみ』、収蔵資料展では『R1 大多喜城の刀剣』であるが、この年はいわゆる令和元年台風(台風15号と19号)が9月から10月にかけて来襲し、博物館も台風と大雨によって来館者が減少したことに留意する必要がある。ちなみに、この令和元年度における秋口の入館者減は、本館においても共通する現象であった(奥田, 2021)。なお、令和2年度に入るとコロナ禍による入館者減が本格化する傾向についても、本館と大多喜城分館で共通していた。

以上の点を勘案すれば、武具の展示と武具以外の展示において、大多喜城分館では入場者数は概ね同程度(多くもないが少なくもない)といえる。もともと大多喜城分館では普段から常設展示スペースに武具を置いていた

ので(例えば2階展示室の刀剣、火縄銃、大砲、弓矢、甲冑など; <https://www.chiba-muse.or.jp/SONAN/josetu.htm>), 武具以外の企画展テーマのほうが新鮮に感じられる側面もあるのかもしれない。あるいは、大多喜城分館の利用者の多くは、とくに企画展示を目的に来館しているわけではないのかもしれない。

2. 令和元年度の日ごとデータからみる入館者傾向

上に示したような入館者動向は、別グラフにも認められる。電子データにアクセス可能な大多喜城分館の入館者記録のうち、令和元年度の日ごとデータを図3に示した。この中で、令和2年3月以降はコロナ禍の影響を強く受けている反面(奥田, 2021)、令和元(平成31)年4月から翌年2月までの11ヶ月間は、まだコロナ禍の影響が現れていないので、図3は大多喜城分館の日ごとの入館者傾向を知ることができる貴重な記録といえる。

さて、図3からわかる、令和元年度の大多喜城分館および本館(2F 有料スペース; 生態園や1F 無料スペース等の利用者数はのぞく)の日ごとの入館者傾向としては、以下4点が読み取れる。

(1) 本館と大多喜城分館の年間入館者数は令和元年度だけでみると同程度

図3にみる年間入館者数は大多喜62,419人に対し、本館62,209人であるので、両館の入館者数は令和元年度だけでみると同程度である。これは本館の職員配備数が研究職45名、事務方および行政職12名であるのに対し、大多喜城分館は職員数4名(研究職3名、事務職1名)の小所帯であることを考えたとき、注目すべき事柄といえる(職員数は令和元年度の値)。同年に本館で行われた企画展示(R1 春の展示『鉄道』およびR

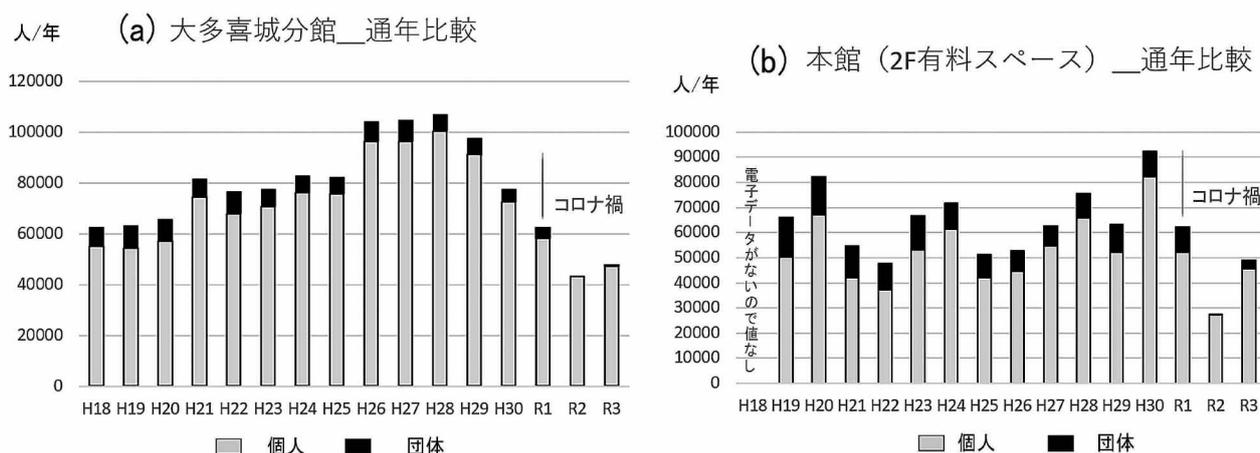


図4. 平成18年度以降の大多喜城分館における年間入館者数の推移（下段：個人，上段：団体）. 大多喜城分館の値は年報（千葉県立中央博物館，2007～2022）から計算. 本館の値は出張展示などの数を除くため電子データから計算. 平成18年度はまだ電子データがなかったため値なし.

1 企画展『ほにゆるい』は本館の企画展示としては好評であったので（奥田，2021），令和元年度における本館の入館者数は少なくない. なお，令和元年度では秋口に大きな台風被害（令和元年房総半島台風）が生じたが（奥田，2021），この種の広域災害は本館も大多喜城分館も同条件とみられる. とはいえ，他の年度にまで拮げれば異なる傾向が現れる可能性もあるので，図3のみに基づいて結論を出すことはまだできない.

(2) 大多喜城分館と本館では入館者の多い季節が異なっている

図3bからはあきらかに，本館では入館者がもっとも多い季節は7～8月の夏休み，それも多くの場合8/13-15前後のお盆期間である様子が見て取れる. 加えて例年，千葉の県立博物館では，6/15の県民の日および11/3の文化の日には入館料が無料になるので，入場者数が特異的に増加する（奥田，2021など）. 対して，大多喜城分館では4～5月に入館者数のピークがある（図3a）. 一方，夏休みの大多喜城分館の入館者数は，お盆の期間を除けば平均値程度である. また，大多喜城分館では6/15，11/3にさほど入場者数が変化しないことも特徴と言える.

同年4～5月に大多喜城分館で企画展示の類は開かれていない. 大多喜町では例年3月末～4月頭の週末に「さくらまつり」が開催されるので，図3に示された4月5日頃のピークは花見客によるものと思われる. 同じく，5月初旬のピークはGWの行楽客によるものであり，この時期には「大多喜レンゲまつり」が開催されるので，春先に大多喜周辺の植物を見に来る観光客は多い. 他の季節に関しては，大多喜城分館では1月2日から4日間に亘り正月開館を実施していたので，1/2-5の入館者数が特異的に増加している. 対して，本館では11月3日の入館者数が特異的に増加している. なお，6/15県民の日の入館者ピークはこの年は見られない（図3）.

(3) 大多喜城分館では平日の入館者（個人）が多い

季節にもよるが，大多喜城分館では本館と比べて，週半ばの平日に入館者が多い. 図3では年間を通じて週単位の変動サイクルが現れているが，このギザギザの谷が本館では深いのに対し，大多喜城分館においては比較的浅い. 具体的な数字としては，本館では平日の入館者数は土曜日の約3分の1，日曜日の5分の1といった値が普通なのに対し（奥田，2019など），大多喜城分館では平日の入場者数は土日と比べて2分の1程度の減少に留まっている.

とくに6月と12月は，本館では入館者の少ない季節にあたり，平日の入館者数は団体入館を含めても50人に満たない日も多い. これに対し，大多喜城分館では6月と12月の平日に，100人近い入館者数が継続的に記録されている. 団体入館を除いた個人入館者では，本館の値はさらに減る. 対して大多喜城分館では，そもそも団体入館者の割合が非常に低い（図3）.

(4) 団体入館の人数は，大多喜城分館では本館と比べて全体に少ない

前項で述べたように，大多喜城分館では本館と比べて個人入館者の割合が高い. 本館では令和元年の秋～冬季（10月から2月）に全入館者の半数以上が団体入館という日がみられるが（図3b），大多喜城では団体入館の割合は，多い日でも3割前後のことが多い.

実は本稿の分析を行う前，筆者は「大多喜城分館の入館者が本館と比べて多いなら，大多喜町は南房総の観光地なので，はとバスのような一般団体の観光バスが多く入っているのだろう」という予想を持っていた. ところが図3の結果は，そのような漠然とした予想を覆すものだった. 団体入館が多いのは本館のほうであり，大多喜城分館では個人入館者が全体の多くを占めている.

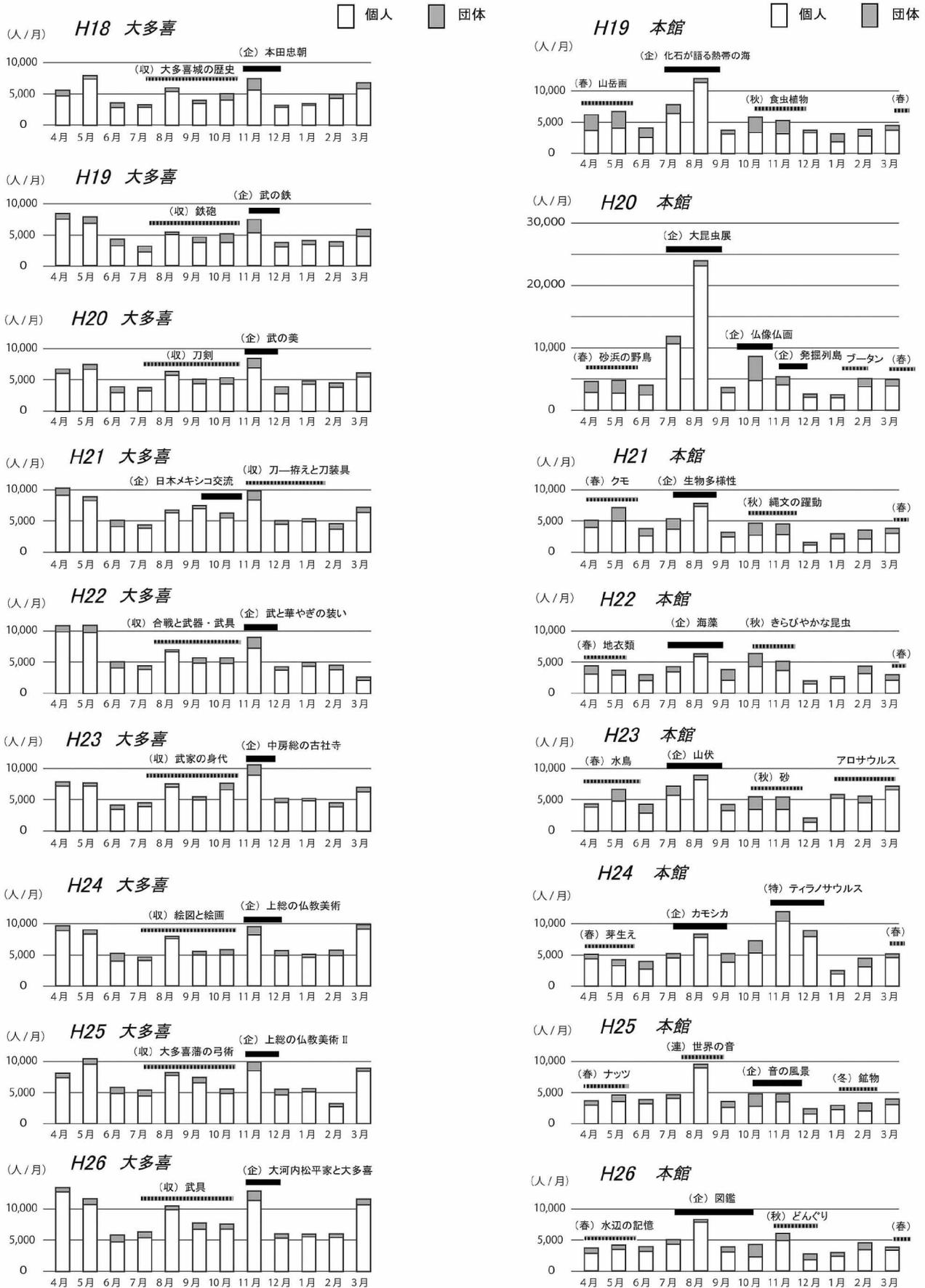


図5. 平成18年度以降の大多喜城分館および本館（2F 有料スペース）の入館者数の月ごとデータ。大多喜城分館は平成30年度より以前の電子データが入手困難のため年報（千葉県立中央博物館，2007など）から作成。本館は，大多喜城分館の形式に合わせる形で電子データから月ごとの入館者数を再計算。本館の年報データには出張展示などの数が含まれているので使用せず。

大多喜城分館の入館者数解析

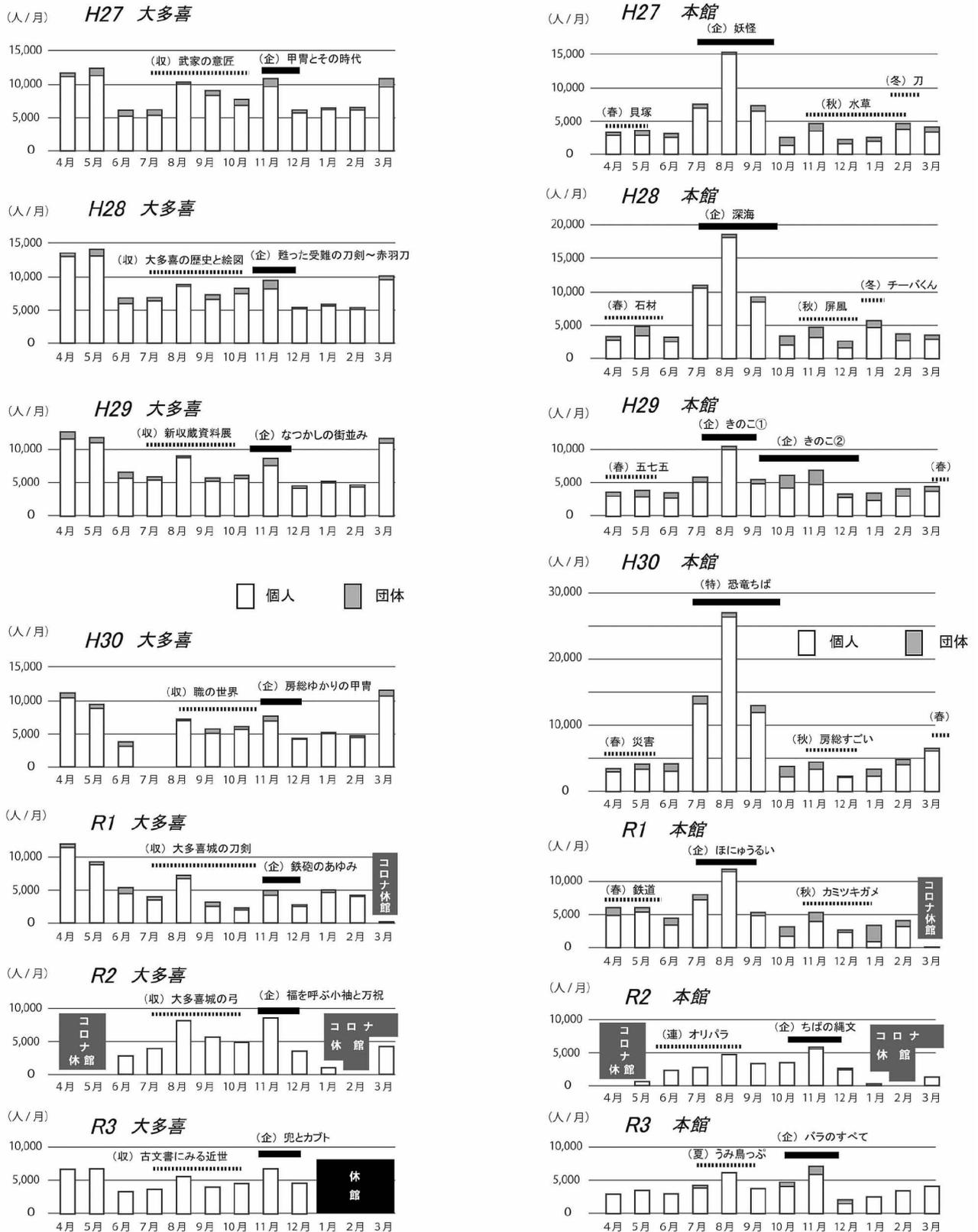


図5. (つづき)

3. 年間人数の経年変化からみる両館の入館者傾向

引き続き、年間入館者数の年ごとの推移を両館についてまとめたものが図4である。結論から言えば、大多喜城分館が本館と比べて高い入館者数を示すのは、令和元

年度だけではない。平成18年4月に大多喜城分館へ改組してからの3年間は、大多喜城分館の入館者は年間6万人程度であり、同時期の本館と比べると少なかった。ところが、改組後4年目(平成21年度)以降は大多喜城分館の入館者が増え、本館よりも多くなっている。さらに平成26-28年度の3年間では、大多喜城分館の年

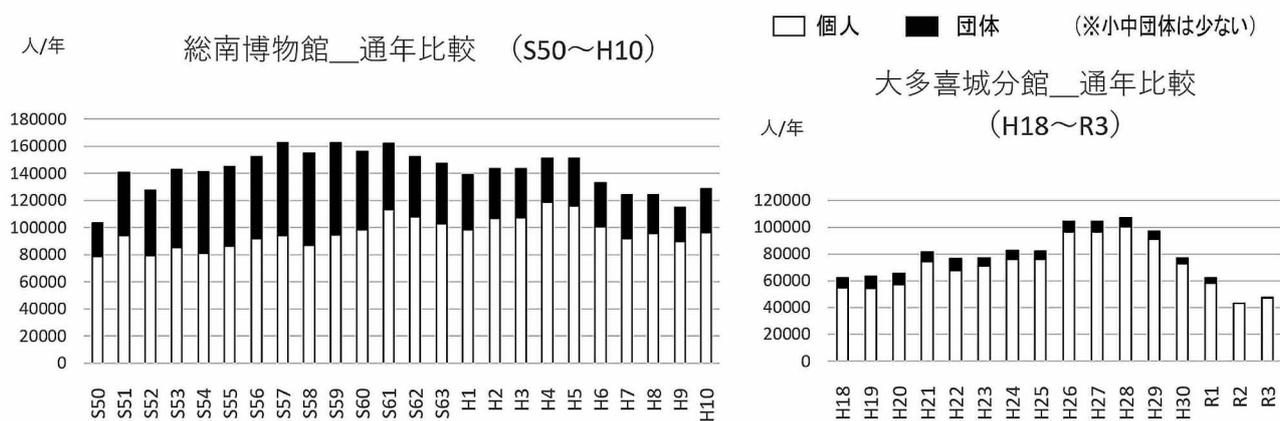


図6. 総南博物館時代（昭和50年の開館以降24年）の記録を加味した大多喜城分館の入館者推移（千葉県立総南博物館，1994～1999）。平成11年から平成17年までの7年間は引用可能な形で入館者記録不明のため表示せず。

間入館者数は10万人越えの高い値を示している。なお、この要因は圏央道の開通によるものと見るのが有力である（平成25（2013）年4月に木更津東IC～東金JCTが開通）。平成30年度の入館者減については、日ごとデータがないので詳細不明だが、大多喜城分館では水道設備の故障のため、6～8月にかけて40日程度の臨時休館を行ったことが原因と思われる（R1以降はコロナ禍による減少）（図4a）。

対して、同時代の本館においては、平成21-22年度、および平成25-26年度の落ち込みが目立っている（図4b）。入館者数の集計データが電子化された平成19年度以降、本館（2F有料スペース）の入場者数が年間10万人を超えたことは一度もなく、7-9月の恐竜ちば展が大好評だった平成30年度でも年間入館者数は92,279人であるので、総じて大多喜城分館の入場者数は本館よりも多い傾向を示している。

4. H18以降の「月ごとデータ」からみる両館の入館者傾向

このような大多喜城分館の入館者動向において、入館者数の内訳（季節ごとの増減や年齢構成など）はどのようになっているのだろうか。大多喜城分館では令和元年度より以前の日ごとデータは入手できないが、過去の博物館年報に掲載された1ヶ月単位の「月ごとデータ」を用いれば、精度は劣るが季節ごとの入館者数の推移を知ることが可能である（図5）。

さて、図5にまとめたH18以降（本館では電子データが整備されたH19以降）における月ごと比較をみるならば、両館の入館者数に関する特徴が見えてくる。図4の通年比較によれば、本館の入館者数があきらかに多かった年度としては平成20年度および平成30年度の2ヶ年が突出しているが、図5の月ごと比較を見るならば、この2ヶ年における本館の入館者増に寄与しているのは、ともに夏の展示であったことが自明である（平成20年度には企画展『大昆虫展』の入場者が

8月に20,000人超え、対して平成30年度には特別展『恐竜ミュージアム in ちば』の入場者が、やはり8月に25,000人超え）。

逆にいえば、これら夏の企画展会期を除けば、年間の入場者数が突出して多かった平成20および30年度であっても、秋から春にかけての本館入場者数は同年の大多喜城分館と比べて大差ないか、月によっては大多喜城分館よりも少なかった（図5）。そして平成21年度以降の数年間では、本館では夏季においても入館者が10,000人/月に満たない年が続いたため、両館の年間入館者数は逆転した（図4）。

本館が再び8月に10,000人/月を大きく超える入館者を得るようになったのは、平成27年度以降のことである（図5）。これ以降、本館ではH27『妖怪と出会う夏』、H28『驚異の深海生物』、H29『きのこワンダーランド』、H30『恐竜ミュージアム in ちば』、R1『ほにゅうるい』など好評を博した企画展または特別展が続いたが、同じ時代、大多喜城分館は3～5月の春先に10,000人/月を超える値を得ていたため、通年合計では大多喜城分館のほうが入館者数は多かった。年間入館者数において本館が再び大多喜城分館を上回ったのは、「恐竜ちば」展が8月に25,000人/月を超える高い値を記録した平成30年度のみである（図4・図5）。

5. 総南博物館の高い入館者水準

このような大多喜城分館における高い入館者水準は、いったい何によるものだろうか。大多喜城分館は平成18（2006）年の開館であり、新しいので、平成元（1989）年の開館以降リニューアルされていない本館よりも入館者が多い——といった考察は間違っている。平成18年4月における大多喜城分館の“開館”も、実態は前身にあたる総南博物館からの改組による名称変更にすぎないので、施設リニューアル等の改修は行われていない、運営母体も変わっていない。

上の事実を追認できる公的記録としては、大多喜城分

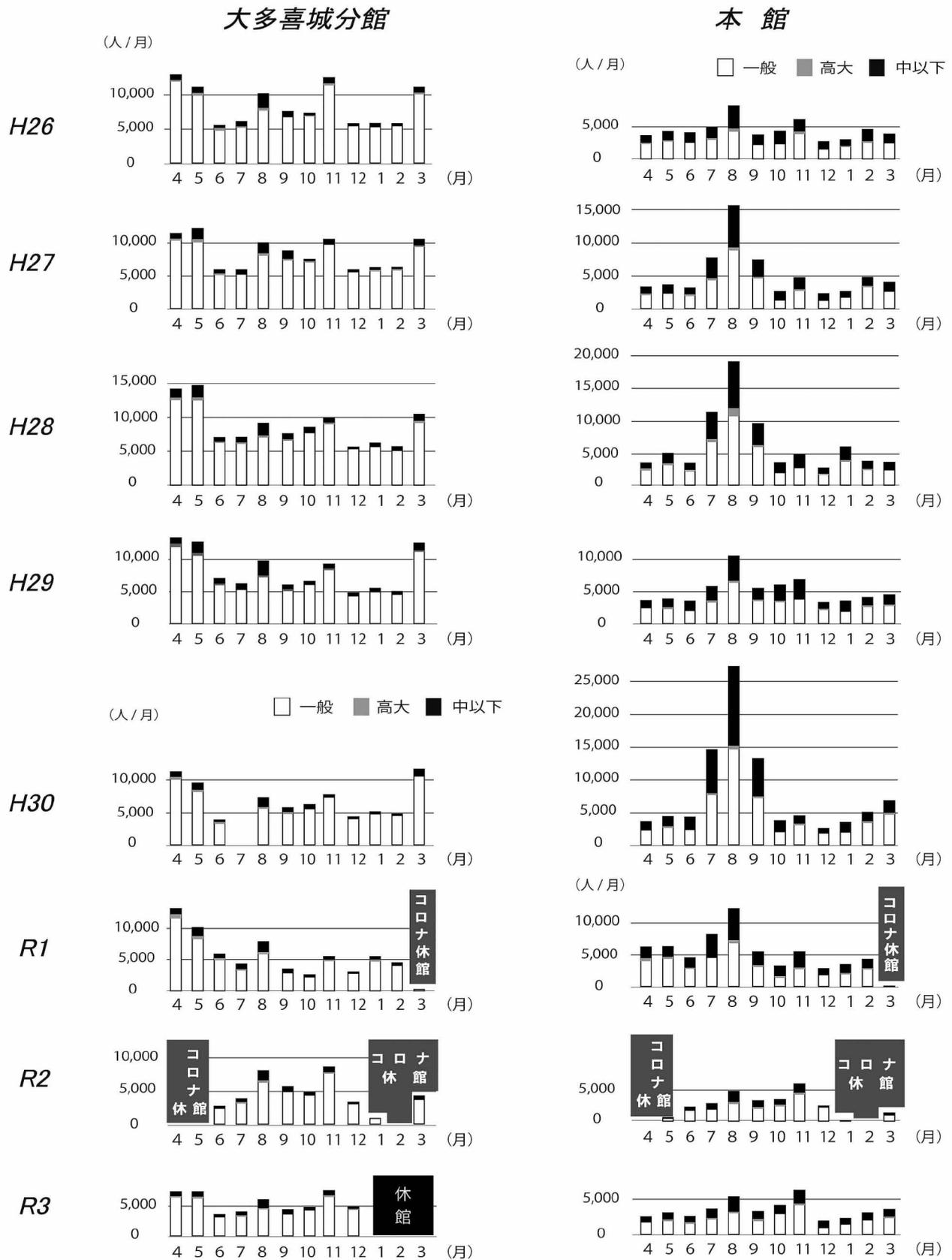


図7. 平成26年度以降の大多喜城分館および本館(2F有料スペース)の入館者数の年齢構成(千葉県立中央博物館, 2007など). 平成25年度以前は年報記載に年齢層の区別がないので計算できず.

館の前身にあたる総南博物館の年報データ(図6)が挙げられる。平成17年まで大多喜城址で開館を続けていた県立総南博物館は昭和50(1975)年の開館だが(千葉県立総南博物館, 1994; 1995; 1996b; 1997; 1998; 1999), 開館初年度から10万人超えの入館者数を示すなど、千葉の県立館としては驚異的な値を示している(しかも初年度は9月からの開館)。これは、総南博物館がオープンした頃は周市町に他の博物館がなく、県立博として夷隅・長生地区の地域博物館としての役割も果たしていた側面もあると思われるが、総南博物館の開館23年目を迎えた平成9年度においても、入館者数は減るどころか115,000人もあり(図6)、これは大多喜城分館が10万人超えの年間入館者数を示したH26~28年と比べてもさらに多い。総南博物館において最も入館者が多かった年度は、昭和57年から昭和61年までの5年間である。この時代、総南博物館の年間入館者数は常時15万人を超えており、最高値は昭和57年に記録した162,789人だった。

なお、総南博物館の時代には団体入館の割合が多かったことも注目される(図6黒棒)。対して、小中学校団体の割合は、同館発行の『20年のあゆみ』(千葉県立総南博物館, 1996a)に掲載された団体人数の年齢内訳をみれば2割に満たない。昭和の時代に総南博物館へ大挙して訪れていた入館団体の8割前後を占めていたのは20歳以上の成人団体であることから(千葉県立総南博物館, 1996a)、これはおそらく遠方から貸切バス等で訪れていた団体客であったと思われる。この当時、近隣の市町村に再建された天守閣は少なかったため、当時として千葉県内の「城」は貴重だったこともあるだろう。現在、大多喜町への貸切バス等のツアー旅行は少なからず減少しているため、上記の昭和時代の光景は現在の大多喜の様子とはだいぶ異なっている。

なお、平成11~18年の期間に関しては引用可能な形での記録を欠いているのでデータがないが、H18以降の大多喜城分館の入館者が総南博物館時代と比べて6割近くにまで減少している理由は、平成16年4月に始まった県立博物館の有料化による可能性が大である。この当時、千葉県は財政危機の中で使用料・手数料を見直し、受益者負担の公平さを保つ必要から博物館等の入館料を徴収、県の機関についても県庁全般にわたる統廃合が行われた。ただし、総南博物館から大多喜城分館へ移行した直接の理由は組織改正であるため、「有料化等による入館者減が移行の直接の理由である」という見方は一般的でない。

以上の考察をまとめれば、昭和の総南博物館を前身とする大多喜城分館は、そもそもの建物施設の集客力が本館と比べて高かった(図4~6)。もちろん本館の入館者数についても、夏の展示を始めとする企画展示期間においては、とくに平成27年度以降は増加している反面、大多喜城分館においては、企画展示の有無はあまり入館者数に影響していないので(図5)、両者の差は常設部分にあると思われる。おそらくだが、総南博物館時代か

らつながる大多喜城分館は、博物館というよりは「城」としてのイメージが強く、城を目指してやってきた観光客が館の中に入ったら展示室があり、常設展示があり、時期によっては企画展をやっていた——というケースが多かったのだろう。結果、本館と比べて、年間を通じて安定した大多喜城分館の入館者傾向(図5)が誕生したと思われる。

6. 年報データにみる大多喜城分館の入館者の年齢構成

それでは、この安定した大多喜城分館の入館者数の中核を占めるのは、こういった年齢層なのだろうか。結論から言えば、これは65歳以上のシニア層であると考えられる。一般に、入館者数の年齢構成は、券売所窓口で記録する日ごとデータが保存されていないかぎり判別できない。かつては本館もそうだったが、幸いなことに中央博物館の年報では、平成26年度から入館者の年齢別人数が印刷記録に加えられ、一般、高大、小中の別がわかるように改められた(図7)。従って、平成26年度以降の年報データを本館・分館ともに同一の年齢区分に基づいて集計し直せば、精度はやや低いながらも両館の入館者の年齢構成を長期にわたって比較することが可能となる。

さて、図7をみると、両館における年齢構成の違いは顕著である。本館では、入館者における中学生以下(小中生および学齢前児童)の割合が全体の4割近くを占めるのに対し、大多喜城分館では中学生以下は全体の1~2割程度にすぎず、8~9割を一般成人が占めている(図7)。では、この大多喜城分館の入館者の8割以上を占める一般成人とは、どのような階層なのだろうか。

その答は、今度は有料/無料の別を示した入館者データ(図8)から読み取れる。県立博物館では中学生以下と65歳以上が無料になるが、平成26年度以降の中央博物館年報では、一般、高大、中学生以下の年齢情報に加えて、有料個人、無料個人、有料団体、無料団体の区別も新たに記録されていた。そこで、今度は大多喜城分館の入館者を“有料者”と“無料者”に2分し、本館も同じように集計し直した上で再度比較した(図8)。

結果はどうか。平成30年度までの大多喜城分館の入館者には、思いのほか有料入館者の割合が少ない事実が読み取れる。それも僅かな差異ではなく、大多喜城分館の有料入館者は多くても2~3割なのに対し、無料入館者は全体の7~8割ほどを占めている。

では、大多喜城分館に多い無料入館者(図8)とはいったい何か。本館の無料入館者の多くを占めるのが小中学生であることは、図7から如実に読み取れる。ところが、大多喜城分館の無料入館者の多くを占めるのは、図7の年齢別グラフをみれば、高大生以下の児童生徒より年上の一般成人である。となれば答はひとつしかない。「大多喜城分館において高い割合を占める無料入館者」(図8)とは、65歳以上のシニア層だと考えられる。高大生より年上の一般成人のうち64歳以下の壮年層

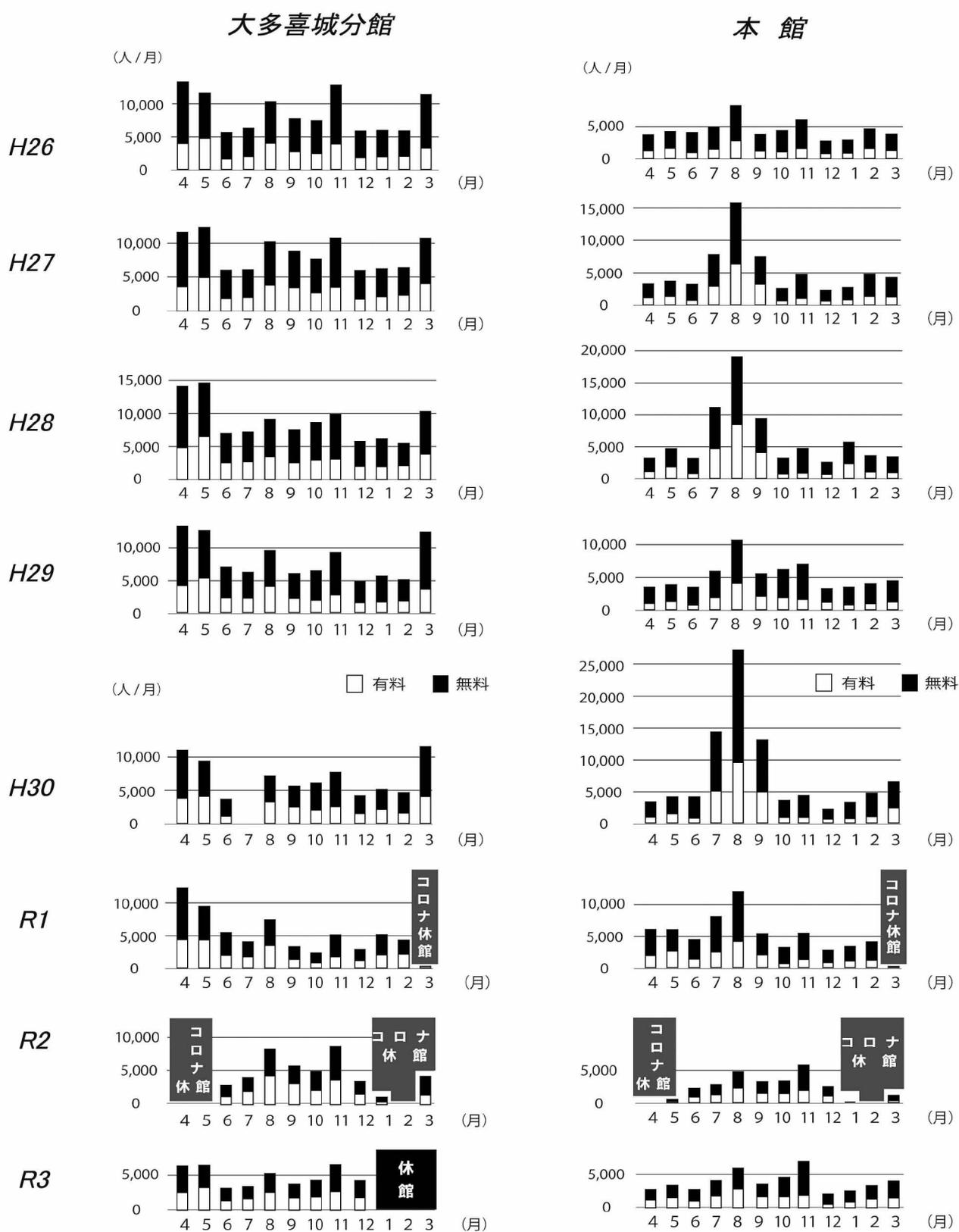


図8. 平成26年度以降の大多喜城分館および本館の月ごと入館者数における有料入館者と無料入館者の割合(千葉県立中央博物館, 2007など). 平成25年度以前は年報掲載に有料/無料の区別がないので計算できず.

は、来館時に入館料が生じるため無料入館者には含まれない。中央博物館の本館は自然誌系の展示がメインであるので、低年齢層の学習の場と考えたとき、小学校団体あるいは親子連れを含む小学生の利用が多いだろう。対して、人文系とくに歴史に興味を持つ人は高齢者（シニ

ア層）に多いので、大多喜城分館では65歳以上の割合が多いのだろう。この差異は両館の利用者層における本質的な違いなので、本館および大多喜城分館の入館者傾向を考える上で重要である。

念のため、大多喜城分館に65歳以上のシニア層が多い事実は、日ごとデータからも検証できる。図3に示した令和元年度、およびコロナ禍の影響下にはあるもの日ごとの電子データが入手可能な令和2～3年度の合計3ヶ年間に於いて、大多喜城分館と本館における65歳以上、中学生以下、その他の別を電子データから直接計算したのが図9である。

得られた結果は自明なもので、令和元年度、2年度、3年度のすべてにおいて、本館では65歳以上のシニア層が全体の2割に満たなかった。対して大多喜城分館では、令和元～3年度の全てにおいてシニア層が4割前後の高い値を示している(図9)。以上のデータからも、大多喜城分館では本館と比べて65歳以上の高齢者が多いことが令和元年度以降においてはあきらかである。

さらに他の年度についても確認するため、博物館年報に記載のあるH26～R3の8年間に於いて「個人一般無料者」を他の個人入館者および団体から分けたグラフが図10である。図10においても本館と大多喜城分館の間には明瞭な差異があり、本館では個人一般無料(≒65歳以上)の割合が全体の2割程度に過ぎないのに対し、大多喜城分館では全体の5割前後を占めている。一方、個人の中学生以下(小中+学齢以下児童)に関しては、この傾向が逆転している。よって平成26年度まで遡ってみても、やはり本館では中学生以下の若年層が多いのに対し、大多喜城分館では65歳以上のシニア層が多い傾向がみとれる。

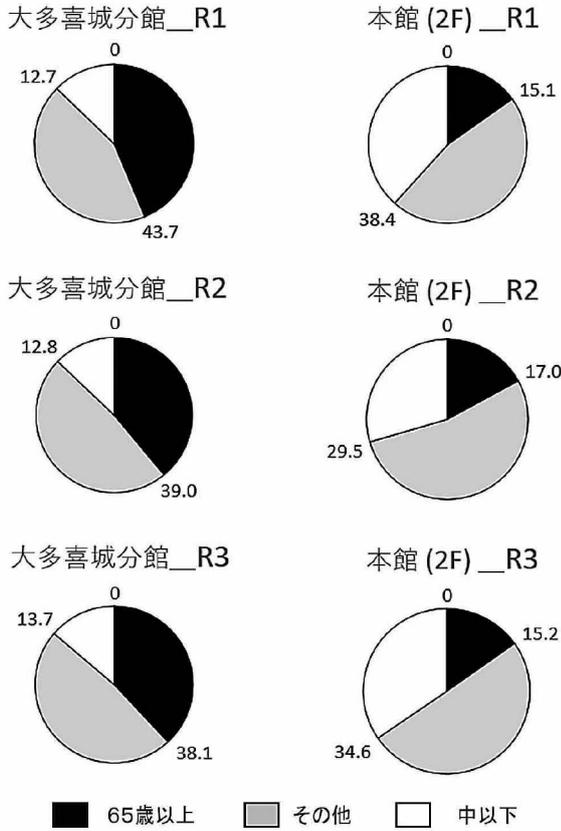


図9. 令和元年度以降の大多喜城分館および本館の入館者数における65歳以上の高齢者および中学生以下(小中生+学齢前)の割合(千葉県立中央博物館, 2007など)。平成30年度より以前については、大多喜城分館の側に65歳以上の高齢者データがないので計算せず。

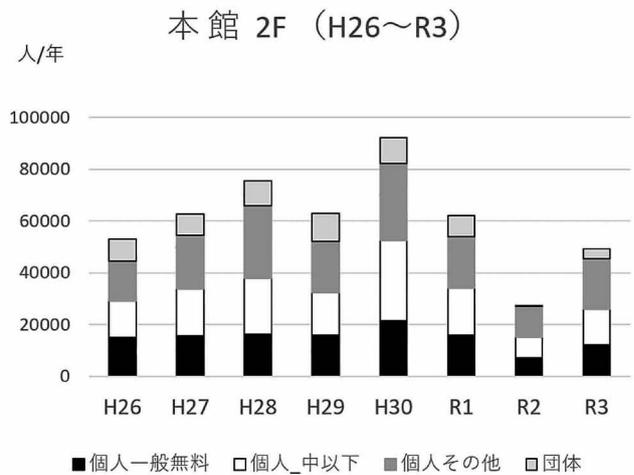
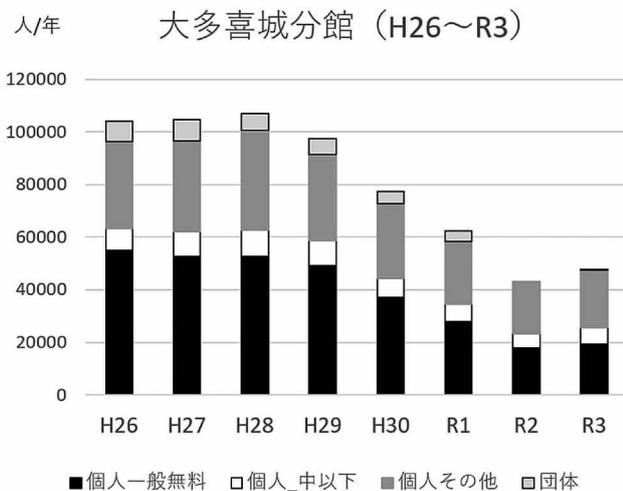


図10. 平成26年度以降の大多喜城分館および本館(2F有料スペース)の入館者数における個人(一般無料+中学生以下+その他)および団体の別(千葉県立中央博物館, 2007などから作成)。

7. 大多喜城分館に65歳以上のシニア層が多い理由

以上の考察に基づくなら、本稿の前半(図3)において、平日に大多喜城分館の入館者数が多かった理由が説明できる。本館では小中学生の利用が多いのに対し、大多喜城分館では65歳以上のシニア層が多いからである。子供や64歳以下の大人は、平日には学校や仕事があるので博物館へ行くことは難しいが、時間の余裕がある65歳以上のシニア層が平日に博物館を訪れるのは自然である。

加えて、上の事実は、大多喜城分館では夏より秋の展示のほうが入館者数の多かった傾向(図2)とも整合的である。秋季に夏休みのような長期の学休期がないことは、65歳以上のシニア層にとっては制約にならない。むしろ秋は紅葉のシーズンであるので、シニア層による大多喜町への来訪を促した可能性がある。

まとめるなら、中央博物館の本館ではどうしても小学生(を含む親子連れ)をターゲットにした自然誌系の企画展示が多くなるので、学休期以外の平日には入館者が顕著に減少するが、大多喜城分館では高齢のシニア層が多く訪れるので、平日にも高い入館者が見込めるのだと思われる。以上の検証に基づくなら今後、本館においては、小学生をターゲットにした自然誌系の展示は春休みとゴールデンウィークを会期に含んだ「春の展示」として開催する一方、高齢のシニア層に好まれることが多い歴史民俗系の展示は、平日が多い季節である「秋の展示」として開催するといった棲み分けが、入館者増の観点からは有効といえるかもしれない。

まとめ

令和3年冬より施設改修等のため休館している大多喜城分館に対し、平成18年の初年度からの入館者動向を解析し、同時期における本館データと比較した。大多喜城分館については平成30年度より以前の電子データ(入館者数の日ごとデータ)が入手困難なため、公表済みの博物館年報から1ヶ月単位の月ごとデータを拾ってエクセル入力することで代用した。また、大多喜城分館の前身にあたる県立総南博物館の入館者データも、過去の出版物の中からみつけることができたので、同じ要領で入力してグラフ化した。

その結果、大多喜城分館の入館者数は中央博物館の本館と同程度か、年度によっては本館よりも多いことが明らかになった。この傾向は、おもに昭和時代に開館していた総南博物館の時代にまでさかのぼって調べてみても同様であった。なお、本館ではお盆を中心とした8月に入館者が多いのに対し、大多喜城分館では3～5月の春先に入館者が多かった。また、本館では学休期以外の平日には入館者が少ないのに対し、大多喜城分館では平日にも入館者が多かった。

この理由としては、本館では小学生を含む親子連れを

ターゲットとすることが多いのに対し、大多喜城分館では時間に余裕のある65歳以上の来館者が多いからと思われる。このシニア層が大多喜城分館の高い入館者傾向を支えている。また、夏季より秋季のほうが大多喜城分館の入館者が多いこと、そして若年層に人気があるとみられる武具以外の企画展示(歴史民俗系の展示等)においても入場者が安定して多いことの原因になっていると思われる。

謝辞

平成4年度まで大多喜城分館に在籍しておられた大谷弘幸主任上席研究員(現・教育庁文化財課森宮分室)には事前に原稿を読んでいただき、貴重な示唆をいただいた。中央博物館教育普及課の廣川政和上席研究員には、本館における令和3年度の入館者データの使用に関してお手数をかけた。大多喜城分館の渡辺善司主任上席研究員(令和4年度当時)と石井友菜研究員には、図1チラシ画像の使用に関してお手数をかけた。平成元年度に中央博物館の館長を務められた望月賢二氏には、本稿の執筆に至るきっかけを作っていただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 千葉県立中央博物館(編). 2007. 年報19(平成18年度). 126 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2008. 年報20(平成19年度). 119 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2009. 年報21(平成20年度). 138 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2010. 年報22(平成21年度). 143 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2011. 年報23(平成22年度). 136 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2012. 年報24(平成23年度). 130 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2013. 年報25(平成24年度). 53+80 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2014. 年報26(平成25年度). 129 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2015. 年報27(平成26年度). 147 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2016. 年報28(平成27年度版). 119 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2017. 年報29(平成28年度版). 155 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2018. 年報30(平成29年度版). 151 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2019. 年報31(平成30年度版). 144 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2020. 年報32(令和元年度版). 138 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2021. 年報33(令和2年度版). 101 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立中央博物館(編). 2022. 年報34(令和3年度版). 111 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- 千葉県立総南博物館(編). 1994. 千葉県立総南博物館年報1. 28+18 pp. 千葉県立総南博物館, 大多喜.
- 千葉県立総南博物館(編). 1995. 千葉県立総南博物館年報2. 30 pp. 千葉県立総南博物館, 大多喜.
- 千葉県立総南博物館(編). 1996a. 20年のあゆみ. 42 pp. 千葉県立総南博物館, 大多喜.
- 千葉県立総南博物館(編). 1996b. 千葉県立総南博物館年報3.

- 17+5 pp. 千葉県立総南博物館, 大多喜.
千葉県立総南博物館 (編). 1997. 千葉県立総南博物館年報 4.
16 pp. 千葉県立総南博物館, 大多喜.
千葉県立総南博物館 (編). 1998. 千葉県立総南博物館年報 5.
16 pp. 千葉県立総南博物館, 大多喜.
千葉県立総南博物館 (編). 1999. 千葉県立総南博物館年報 6.
18 pp. 千葉県立総南博物館, 大多喜.
奥田昌明. 2018. 平成 19 ~ 28 年度の入館者統計データに基づいた, 中央博物館本館における常設展リニューアルの必要性ならびに方向性. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 14(1): 47-64.
奥田昌明. 2019. 中央博物館における平成 29 ~ 30 年度上半期の入場者データおよび過去 12 年間の企画展示 — 企画展と季節展を同じ土俵で比較できる指標の開発と, 今後の入館者動向について. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 14(2): 93-108.
奥田昌明. 2021. 平成 30 年度から令和 2 年度における入館者数の統計解析 — 中央博物館の来館者変遷の傾向およびコロナ禍の影響など —. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 15(2): 139-157.

Variations in the Number of Visitors of the Ootaki Castle Branch of the Natural History Museum and Institute, Chiba during 2006-2021: Comparison with the Main Branch

Masaaki Okuda

Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan
E-mail: m.okd10@pref.chiba.lg.jp

The Ootaki Castle Branch of the Natural History Museum and Institute, Chiba, which succeeded the Prefectural Sonan Museum in 2006, has been closed since 2021 because of renovation on the exhibition spaces. This paper reports the analyses on the number of museum visitors (NMV) of the Ootaki Castle Branch during the 2006-2021 fiscal years. Since no electric data for the NMV are available except for the Reiwa era (2019-2021), the printed data on the annual reports of the Chiba prefectural museums are used for the era before 2018 to explore the age distribution and seasonal variations in the museum visitors. Results show that the NMV of the Ootaki Castle Branch is almost same as, or sometimes higher than that of the Main Branch located in Chiba city. The majority age group is senior citizens over 65 years old, resulting in the higher NMV during week days.